

平成21年 6月 8日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18320003
 研究課題名（和文） 「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの
 貢献の試み
 研究課題名（英文） Tentative Approaches to the Modern Problems of “Life, Body and
 Mind” from the Viewpoint of Applied Phenomenology
 研究代表者
 榊原 哲也 (SAKAKIBARA TETSUYA)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
 研究者番号：20205727

研究成果の概要：

「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献を試みた本研究は、(1) 看護ケアと緩和ケア、(2) 統合失調症や自閉症などの精神病理、(3) 認知科学、認知言語学、システム論、(4) 舞踊論と身体論の各分野において、一定の応用現象学的アプローチを行うことができた。また、本研究遂行の過程で、ドイツや北欧の研究者たち、さらには本研究の開始とほぼときを同じくして「応用現象学」が注目され始めた韓国の研究者との交流も深まり、今後の研究の連携の可能性が開かれた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
2007年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
年度			
総計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：応用現象学、ケア、自閉症、精神医学、システム論、認知科学、認知言語学、舞踊的身体

1. 研究開始当初の背景

本研究応募の背景には、現代ほど「いのち」「からだ」「こころ」をめぐる諸問題が喫緊の課題となっている時代はない、という認識があった。学校教育の現場では凶悪な少年犯罪の増加を受けて、1990年代後半以降、「いのちの大切さ」をどう教えるかが盛んに議論され、「こころの教育」の重要さが声高に叫ばれていた。また阪神大震災以降、災害や医療の現場では、「からだ」を治療するだけで

なく、「こころ」のケアを行うことが重要であるとの認識が常識になりつつあった。さらに現代医療は、科学技術の進展にともない、誕生についても死についても、自らが介入しうる領域を広げてきたが、それにとまなう生殖医療技術、クローン作成、再生医療技術をめぐる諸問題や、延命治療と安楽死、脳死と臓器移植をめぐる諸問題など、いわゆる生命倫理上の諸問題は、「いのち」や「からだ」に関する治療や操作が科学技術上可能にな

る一方で、本来それに伴うべき「こころ」の問題が十分に議論されていないことを示しているように思われたのである。

自然科学やそれに基づく科学技術の発展を支えたのは、思想史的な観点から見れば、近世に表立った形で成立した精神と物体、「こころ」と「からだ」を峻別する二元論であると言ってよいが、上述のような「いのち」、「からだ」、「こころ」をめぐる諸問題は、「こころ」と「からだ」が決して峻別して考えられるべきものではなく、むしろ「いのち」という視点から、これら三つの密接な絡み合いこそが見つめられるべきであることを、示唆しているように思われたのである。

20世紀初頭にフッサールによって創始された現象学的哲学は、現代の自然科学や科学技術が拠って立つ立場、すなわち 経験によって実際に検証できる科学的知識のみを重視しようとし、自然科学的方法の優位を主張して精神諸科学にまでその方法を適用しようとする、19世紀半ば以降に隆盛した自然科学の実証主義 の立場に対して、あらゆる自然科学的な先入見を取り払い、「生」についてのありのままの直接的経験に立ち返ろうとする批判的諸動向の一つとして成立し、展開した。それは、以上の文脈で言えば、「こころ」と「からだ」とを分断することなく、「生(Leben / life) (=いのち)についてのより根源的で直接的な経験に立ち戻り、これら三者の関係をもう一度見つめなおそうとする思想運動であったといえるだろう。とすれば、現象学的哲学は、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代の諸問題に対して、理論的側面から何らかの寄与をなすことができるのではないか。それが本研究計画の発想の出発点であった。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀初頭にフッサールによって創始され、現代哲学および現代思想においても大きな影響力を持ち続けている現象学的哲学の視点から、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代が直面する諸問題に対して、理論的な寄与をなそうとする試みであった。

無論、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代の諸問題は、歴史文化や社会制度、経済の発展や価値の多様化など、現代社会のさまざまな要素と結びついており、それらを解決することは容易ではない。本研究も、これらの問題の実践的解決を直接に目指すものではなかった。けれども、現象学的哲学が、あらゆる事象を、自然科学的には捉えることのできない「生」(=いのち)にとっての「意味」という視点から捉え、その意味の源を明らかにしようとする理論的な営みであるとすれば、「いのち・からだ・こころ」をめぐる

現代の諸問題に対しても、それらが「生」にとっていかなる「意味」をもつのか、その源を明らかにする、という仕方での理論的、哲学的なアプローチは可能なのではないが。本研究が3年間の研究期間内に目指したのも、この「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的諸問題に対する、現象学的哲学の視点からの理論的・哲学的解明であった。

3. 研究の方法

まずもって研究分担者全員で最初のミーティングを開き、研究遂行の具体的な手順を確認する手続きを行ったあと、相互に連携しながら、まず各自が「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題に対する応用現象学的研究に取り組むことにした。

具体的には、当面、(1)看護の場面での「からだ」と「こころ」のケアを、「いのち」という視点から現象学的に捉え、反省的記述の方法を模索すること、(2)統合失調症、自閉症などの精神病理を、「からだ」と「こころ」の統合としての「生(いのち)」という現象学的視点から解明すること、(3)認知科学、神経科学、システム論などにおける「からだ」と「こころ」をめぐる諸議論を、「生」という現象学的視点から問い直すこと、(4)舞踊論や身体論に見られる「からだ」をめぐる諸議論を、「からだ」と「こころ」と「いのち」の絡み合いという視点から現象学的に解明することという4つの課題を設定し、(1)を榊原、和田、浜渦が、(2)を浜渦、谷、村上が、(3)を山口、野家、宮原、斎藤が、(4)を貫が中心となって担当することとした。

また、各研究者はさらに、この方針に従い、各年度ごとに具体的な研究課題も設定した。

そして、これらの研究とともに、他方では、国内外から専門家を招いて講演会ないし共同討議を行い、その成果をさらに各自の研究に反映させるといった方法をとった。

4. 研究成果

(1) 初年度である2006年度は、まず研究分担者全員で第1回ミーティングを開き、研究遂行の方向と具体的手順を確認した上で、相互に連携しつつ、まず各自が「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題に対する応用現象学的研究に取り組んだ。

榊原は、看護ケアにおける「いのち・からだ・こころ」の諸問題に取り組むために、「病い」の体験に注目してケアの現象学の見取り図を描き、かつ研究全体を統括した。和田は、こころの問題に対する自然科学的なアプローチに基づく成果を、現象学に固有な1人称的な反省の観点からの考察と比較検討した。浜渦は、ケアの現象学についての考察と並行して、精神医学と現象学を繋ぐ新たな応用現

象学の道を探るため、脳科学と現象学、ナラティブとパースペクティブといったテーマで考察を行った。谷は、一方で生と死の問題を現象学的観点から扱った論文によって現象学の新たな次元を開く試みを示し、他方で日本における精神医学と現象学的哲学の関係を扱った論文によって現象学の応用の可能性と新たな問題点を指摘した(両論文はドイツで公刊された)。村上は、国立成育医療センターにおいて、自閉症に関するフィールドワークを行った。とくに医師・心理士と共同で、自閉症の自己意識についての質的研究を開始した。山口は、認知科学と現象学の関係をめぐり、B.リベットの"Mind Time"の考察をフッサールの時間論に批判的に統合する論文を執筆し、「時間と自由」の問題を探求し、フッサール発生的現象学における倫理の構築を試みた。野家は、「こころ」の知的機能としての「認知」を経験の全体構造において考察するための方法論(「自然化された現象学」)の確立を目指した。齋藤は、生命(いのち)・身体(からだ)システムから創発的に出現した心(こころ)システムに特異な特徴(ないし可能性)としての「他者の受容」の問題系を、現象学の一つの徹底形態として倫理=政治哲学的問題系へと橋渡しすることを試みた。宮原は、時制をめぐる認知言語学の理論とフッサールの時間意識の分析での図表表現が酷似していることを発見するとともに、その理論的背景を分析した。貫は、舞踊(ダンス、バレエ、舞踏)について、舞踊者ならびに、それをみる観者の身体のあり方の現象学的解明をおこなった。

またこれらの研究の相互連携の上に、海外から4名の研究者を招き、第1回応用現象学会議を開催した。応用現象学の試みの多様さと今後の豊かな可能性を感じさせてくれる実り多き会議であった。

(2) 2007年度は田口茂を新メンバーに加え、各自が引き続き応用現象学的研究を行うとともに、さらに海外の研究者や外部の専門家をも招いて、共同で応用現象学会議を開催し、共同研究の実質を深めた。

研究代表者榊原は、応用現象学の基礎となるべきフッサール現象学の展開を今一度確認すると共に、看護ケアにおける「いのち・からだ・こころ」の諸問題への現象学の応用可能性を追求しつつ、研究全体を統括した。和田は、フッサール現象学における意識生(意識生命)という概念に視点を定め、意識といのちと心の関わりについて現象学の観点から探究した。浜渦は、「ケアの人間学」および「ケアの現象学」をテーマに研究会やシンポジウムを運営しつつ、「生と死のケア」や「緩和ケアと尊厳」などについて考察を深めた。宮原は、現象学の認知言語学への応用研究として、認知言語学と現象学の統合理論

を構築すべく、ラネカーのいくつかの根本概念をとりあげ、イメージ・スキーマ理論をフッサールの現象学の立場から補完する試みを行った。谷は、北欧現象学会(コペンハーゲン)における講演や、臨床哲学シンポジウム(東京)の企画・司会をつうじて、異文化圏の現象学者や、精神医学などの研究者と研究の交換を行なった。村上は、成育医療センターにおいて自閉症に関するフィールドワークを行い、精神病理学的な現象学の試みを行った。山口は、ルーマンのシステム論とフッサール現象学の対比的考察を巡る論文発表を行った。田口は、自己・自我論および他者論の観点から、「いのち・こころ」の問題に接近するための現象学的思考法の特性を解明した。齋藤は、ドイツ観念論とオートポイエーシス理論を下敷きに、「いのち」が「からだ」ならびに「こころ」へと自らを展開してゆく過程を総括的に概観し解明した。さらに野家、貫も、各自の視点から「いのち・からだ・こころ」をめぐる諸問題に対して、応用現象学的な試みを行った。

また以上の個別研究と連携させつつ、この年度は「看護ケア」と「システム理論」をめぐって、海外から2名、国内から1名の研究者を招き、さらに国内の看護の現場で実際にケアに携わっておられる3名の看護師の方々を招いて、2日間に渡る第2回応用現象学会議を開催した。

(3) 最終年度である2008年度は、それまでの成果を踏まえ、各自がさらに応用現象学的研究を行うとともに、第3回応用現象学会議を開催して共同研究の実質を深め、研究成果をまとめることを目指した。また、本研究開始とほぼ時を同じくして「応用現象学」が注目され始めた韓国の研究者との交流も図った。

研究代表者榊原は研究全体を統括しつつ、「いのち・からだ・こころ」をめぐるケアの現象学の基礎と展開の考察に努めた。和田はいのちの諸相のなかで、現象学的に反省可能な意識のいのちに焦点をあて、身体や死の問題とも関連づけて考察した。浜渦は現象学的精神医学とケアの人間学を繋げつつ、ケアの現象学へと展開する研究を推し進めた。谷はこの問題を「暴力」の問題と絡めて、いわゆる「こころの傷」にも考察を広げ、さらにこの問題を含む別角度からの研究プロジェクトを組織した。村上は、発達障害に関する研究をまとめ、治癒と発達の構造分析に着手した。山口は、『人を生かす倫理』の執筆を通して、間身体性に根ざす発生的倫理の構築を試みた。齋藤は「いのち」が「からだ」ならびに「こころ」と取り結ぶ関係をフッサールの「基づけ」という考え方をふたたび導

入することで明らかにするとともに、現象学の事象分析の「極北」である「時間」の問題にあらためて取り組んだ。宮原は、現象学的言語論や認識論の洞察を認知言語学の具体的な理論と比較検討し、両者の相互補完的研究の必要性を明らかにした。野家は、従来の表象主義や機能主義の認知観を超えた新たな認知の枠組みを引き続き探求した。眞は舞踊の美的分析などを通じて「からだ」と「こころ」の現象学的哲学的解明をおこなった。田口はフッサールとレヴィナスの思考を主に参照しつつ、脳死臓器移植等の倫理・宗教的問題について研究を行った。

以上の研究を踏まえ、年度末に3年間の研究成果を冊子として「研究成果報告書」にまとめた。

3年間に渡る本研究によって、(1) 看護ケアと緩和ケア、(2) 統合失調症や自閉症などの精神病理、(3) 認知科学、認知言語学、システム論、(4) 舞踊論と身体論の各分野において、一定の応用現象学的アプローチを行うことができた。また応用現象学に関する海外の研究者との今後の連携の可能性も開かれた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計44件)

1. 榊原哲也、The Experience of Illness and the Phenomenology of Caring、論集、25、13 - 22、2007、無
2. 斎藤慶典、愛の不可能性、あるいは倫理、思想、989、26 40、2006、無
3. 谷 徹、Phänomenologie des Lebens und des Todes、*Leben als Phänomen* (Königshausen & Neumann)、231 - 241、2006、無
4. 谷 徹、>>Klinische Philosophie<< und das Zwischen、*psycho-logik* (Verlag Karl Alber)、1、304 - 316、2006、無
5. 野家伸也、In Search of the Totality of Experience: Husserl and Varela on Cognition、フッサール研究、4/5、56 62、2007、無
6. 浜過辰二、脳科学と現象学、統合学研究叢書『「統合学」へのすすめ』、3、348 367、2007、無
7. 宮原勇、現象学とエポケー - フッサールはデカルトの徒なのか、ピュロンの徒なのか、西洋古典叢書月報、63、1 4、2006
8. 村上靖彦、「ミニカー並べ」の現象学 自閉症児にとって「私」とは何か、現代思想、34・12、218 230、2006、無
9. 山口一郎、リベットの「無意識的時間持続(0.5秒)」とフッサールの過去把持、白山哲学、41、81 - 107、2007、無
10. 榊原哲也、現象学とは何か 看護ケア理論における現象学的アプローチの理解のために、緩和ケア、17(5)、386 390、2007、無
11. 榊原哲也、看護ケア理論における現象学的アプローチ その概観と批判的コメント、フッサール研究、6、97 - 109、2008、無
12. 榊原哲也、フッサール、哲学の歴史、12、101 107、2008
13. 浜過辰二、Caring from the Phenomenological Point of View - Decision-making in terminal care in Japan、静岡大学人文学部人文論集、58(2)、1 - 15、2008、無
14. 浜過辰二、死生観を育てよう 「ケアの人間学」合同研究会、臨床看護、2007(11)、2011 - 2015、2007、無
15. 浜過辰二、緩和ケアと尊厳 ケアの現象学的人間学からのアプローチ、緩和ケア、17(5)、395-398、2007、無
16. 浜過辰二、生と死をケアすること ケアの現象学的人間学から、哲学(日本哲学会編)、58、79 96、2007、無
17. 村上靖彦、二次元空間論 自閉症児の描画と知覚、現代思想、35(7)、212-223、2007、無
18. 田口茂、懐疑論と理性 フッサールとレヴィナスにおける現象学的思惟の動性、哲学論集、36、17 36、2007、無
19. 和田渡、ベルナウ時間意識草稿の解読 根源的な時間構成的体験の反省、文化学年報、57、193 210、2008、無
20. 山口一郎、法のパラドクス(ルーマン)と超越論的事実性(フッサール)、フッサール研究、6、18 29、2008、無
21. 山口一郎、沈黙に発する宗教性と倫理、パレシア、2、3 31、2008、無
22. 斎藤慶典、「非 - 主観的」現象学のために、思想、1004、120-151、2007、無
23. 榊原哲也、Struktur und Genesis der Fremderfahrung bei Edmund Husserl、Husserl Studies、24(1)、1-14、2008、有
24. 浜過辰二、私の考える臨床哲学 私はどこから来て、どこへ行くのか、臨床哲学、10、3-20、2009、有
25. 浜過辰二、スピリチュアルケアと臨床哲学、緩和ケア、19(1)、31-33、2009、無
26. 浜過辰二、フッサールとシュッツ 対話としての臨床哲学のために、メタフィジカ、39、13 23、2008、有
27. 浜過辰二、Schutz and Edmund Husserl—For Phenomenology of Intersubjectivity—、*Alfred Schutz and his intellectual partners*, ed. by Hisashi Nasu, Lester Embree, George Psathas, Ilja Srubar, UVK Verlagsgesellschaft mbH, Konstanz、46-67、2009、無
28. 斎藤慶典、瞬間と偶然、あるいは時間と実在、思想、1019、55 76、2009、無

29. 齋藤慶典、「基づけ理論(フッサール)」と「非法則論的一元論(デイヴィッドソン)」 心身問題の進展のために、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み、236-254、2009、無
30. 谷 徹、暴力論の基礎考察、暴力と人間存在、17-69、2008、有
31. 谷 徹、危機とノの意味、文明と哲学、1、102-116、2008、無
32. 谷 徹、臨床哲学とあいだ、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み、332-342、2009、無
33. 和田渡、いのちのアスペクト 現象学的観点からの考察、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み、318-331、2009、無
34. 貫成人、東京身体：アジアから問う身体的実存、実存思想論集、22、5 29、2008、無
35. 貫成人、意識のさまざまな起源、大航海、69、28 35、2009、無
36. 貫成人、近代の残滓としての芸術、大航海、70、42-49、2009、無
37. 貫成人、上演芸術の現象学：ダンス観者における引き込みの分析、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み、318-331、2009、無
38. 村上靖彦、沈黙と回復～メルロ＝ポンティの主体変容論、現代思想、35(16)168-181、2008、無
39. 村上靖彦、Découverte d'autrui chez les autistes et la structuration du sujet – Pour une phénoménologie généalogique、*Annales de Phénoménologie*、8、163-180、2009、有
40. 村上靖彦、沈黙の聴取～『存在と時間』を不安と回復の現象学として読む、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み、275-288、2009、無
41. 田口茂、「犠牲」の倫理学 脳死臓器移植問題に寄せて、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み、302-317、2009、無
42. 宮原勇、認知言語学と現象学的言語論の可能性 イメージ・スキーマ理論と志向性分析の統合の試み、「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み、255-274、2009、無
43. 山口一郎、時間化のパラドクスとゼノンのパラドクス 相互覚起(作用)と因果関係、白山哲学、43、137-159、2008、無
44. 野家伸也、フランシスコ・ヴァレラにおける科学と宗教 「自然化された現象

学」の立場からの「知の統合」の試み、金城学院大学キリスト教文化研究所紀要、12、45-68、2009、無

〔学会発表〕(計23件)

1. 榊原哲也、Struktur und Genesis der Fremderfahrung bei Edmund Husserl、The 5th Annual Conference of the Nordic Society for Phenomenology、April 20、2007、University of Copenhagen、Denmark
2. 浜渦辰二、フッサール現象学から見た「人間と環境」、第2回学際現象学研究会、2007年12月8日、京都大学総合人間学部
3. 浜渦辰二、北欧の高齢者ケア視察研修報告、平成19年度第6回「臨床と法」研究会、2007年11月22日、静岡大学人文学部
4. 浜渦辰二、緩和ケアと尊厳 ケアの現象学的人間学からのアプローチ、第2回中部生命倫理研究会、2007年7月14日、名古屋大学文学部
5. 浜渦辰二、生と死をケアすること ケアの現象学的人間学から、日本哲学会第66回大会、2007年5月19日、千葉大学文学部
6. 谷 徹、Das Ich, der Andere, und die Urtatsache、The 5th Annual Conference of the Nordic Society for Phenomenology、April 21、2007、University of Copenhagen、Denmark
7. 田口茂、地平の破れ目 フッサールの明証論と原自我論を媒介として、科研費「『いのち・からだ・こころ』をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」講演会、2007年12月7日、立命館大学
8. 山口一郎、身体論の再発見：西欧近・現代における身体論(科学の哲学への統合) 日本体育学会第58回大会、2007年9月6日、神戸大学
9. 榊原哲也、Phenomenology in a different voice、The XXIIth World Congress of Philosophy、August 3、2008、Seoul National University、Seoul、Korea
10. 浜渦辰二、リビング・ウィルを考え直す、患者のウェルリビングを考える会、2009年1月17日、あすてっぷ K O B E
11. 浜渦辰二、ビジネス・倫理・ケア、西日本哲学会、2008年12月7日、琉球大学
12. 浜渦辰二、終末期と高齢者のケア～ケアの現象学的人間学から臨床哲学へ～、第3回医療人文学研究会、2008年4月23日、大阪大学
13. 谷 徹、Sinn und Gewalt、Work Shop “Phänomenologie und Gewalt”、October 23、2008、Institut für die Wissenschaften vom Menschen、Wien、Austria

- 14 . 谷 徹、Sense as Sending、Organization of Phenomenological Organizations III, Hong Kong, December 18, 2008、The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong, China
 - 15 . 村上靖彦、"We did not know what happened to us" – A Phenomenology of Reality, Annual Meeting in the Nordic Association of Phenomenology, 2008.4.27、Vytautas Magnus University, Kaunas, Lituanie
 - 16 . 村上靖彦、The Phase of affection, the Sphere of Apparition – Fundament for the phenomenological psychopathology, Colloque "Ontology and Phenomenology", 2008.7.5、Keio University
 - 17 . 田口茂、From Henological Reduction to Phenomenology of "Name" – Interpretation of Japanese Pure Land Thought, Envisioning Japanese and Chinese Philosophical Potentials in 21st Century, 2008.12.14, Hong Kong Institute of Education
 - 18 . 田口茂、Reduction to "Trace": Phenomenological Interpretation of Japanese Pure Land Buddhism、Organization of Phenomenological Organizations III, Hong Kong、2008.12.19、The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong, China
 - 19 . 田口茂、Die Unabweisbarkeit der Wirklichkeit. Phänomenologische Neudefinition der Erfahrung im Anschluss an Husserls Evidenzbegriff、第8回フッサール研究会、2009.3.14、八王子大学セミナーハウス
 - 20 . 山口一郎、気と脳科学の現象学、人体科学会第18回大会、2008.11.23、関西大学
 - 21 . 宮原勇、認知言語学と現象学的言語論の可能性 – イメージ・スキーマ理論と志向性分析の統合の試み、京都言語学コロキウム年次大会、2008.8.23、芝蘭会館(京都市)
 - 22 . 宮原勇、抽象概念の形成と copula 文の構造について – 認知言語学と哲学的言語論の視点から –、京都言語学コロキウム、2008.12.13、京都大学
 - 23 . 野家伸也、現象学的システム論の可能性 ヴァレラとルーマン、第32回フッセル・アーベント、2008.5.31、東北大学
- (図書)(計6件)
- 1 . 斎藤慶典、『デリダ なぜ「脱」構築は正義なのか』、NHK出版、126頁、2006
 - 2 . 斎藤慶典、『哲学がはじまるとき 思考は何/どこに向かうのか』、筑摩書房、256頁、2007

- 3 . 斎藤慶典、『知ること、黙すること、遣り過すこと 存在と愛の哲学』、講談社、244頁、2009
- 4 . 村上靖彦、*Association pour la promotion de la phénoménologie*、Hyperbole – Pour une psychopathologie lévinassienne、115p. 2008
- 5 . 村上靖彦、『自閉症の現象学』、勁草書房、247頁、2008
- 6 . 山口一郎、『人を生かす倫理 フッセル発生的倫理学の構築』、知泉書館、469頁、2008

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

神原 哲也 (SAKAKIBARA TETSUYA)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：20205727

(2) 研究分担者

山口 一郎 (YAMAGUCHI ICHIRO)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：20287551

和田 渡 (WADA WATARU)

阪南大学・経済学部・教授

研究者番号：80210988

浜渦 辰二 (HAMAUZU SHINJI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70218527

野家 伸也 (NOE SHINYA)

東北工業大学・工学部・教授

研究者番号：80156174

谷 徹 (TANI TORU)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40188371

宮原 勇 (MIYAHARA ISAMU)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90182039

貫 成人 (NUKI SHIGETO)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：80208272

斎藤 慶典 (SAITO YOSHIMICHI)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：10211260

村上 靖彦 (MURAKAMI YASUHIKO)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授

研究者番号：30328679

田口 茂 (TAGUCHI SHIGERU)

山形大学・地域教育文化学部・准教授

研究者番号：50287950

(3) 連携研究者

なし